



テスト場面における配慮と実践の ガイドブック

松江市立島根小学校

もくじ

「読むことに困難がある」とは	1
「書くことに困難がある」とは	2
テストでのICT活用の意義	3
どの子に、どんなサポートが必要か	4

ICTを活用したテストの方法 読むことの困難に対して

① 市販テストの読み上げデータの活用	6
② 音声ペンの活用	7
③ 端末のテキスト認識の活用	8
④ 専用サイトの活用	9

ICTを活用したテストの方法 書くことの困難に対して

入力の活用	10
組み合わせての活用	11
取り組みを振り返って	12



「読むことに困難がある」とは

通常学級に在籍する児童の中に、みんなと同じ方法では学びにくく特別な支援を必要としている子ども達がいることは、広く知られるようになってきています。

その中に、「読むことに困難がある」子ども達があります。

- 目の動きがスムーズでないため、どこを読んでいたかわからなくなってしまう子
- 背景がまぶしくて、文字が読みにくくなってしまう子
- 不注意が高く、文字を追っていくことが難しい子
- 文字がスムーズに音に変わらないため、読むのに過度に時間がかかってしまう子 などなど

困難の背景は様々ですが、どのケースでも「読むこと」に過度の負荷がかかってしまいます。そのため、「全く読めない」という状況ではないものの

- ・ 「読むこと」に精いっぱい意味が入ってこない
- ・ 「読むこと」で疲れ切ってしまう、継続できない

といった状況に陥ってしまいます。

「文字からスムーズに情報が取得できない」と、それが前提となっている現在の多くのテストの場面で、正当な評価を受けることができないという状況を生んでしまいます。





「書くことに困難がある」とは

「書くことに困難がある」場合も、みんなと同じ方法では学びにくいいため、特別な支援を必要としています。

- 見ただけでは、文字の構成要素同士の関係がわからなくて形が取れない子
- 不注意が高く、文字の構成要素を見落とししたり、似た形と混同したりしてしまう子
- 手先をうまく動かすことができず、文字が書くべき場所に収まらない子
- 音と文字の一致が弱く、書きたい文字がスムーズに浮かばなかったり、似た形と混同してしまう子 などなど

ここでも困難の背景は様々ですが、どのケースでも「書くこと」に過度の負荷がかかってしまいます。そのため、「全く書けない」という状況ではないものの

- ・ 情報を参照可能な形で残すことができない
- ・ 過度に時間がかかってしまい、何を書いていたかわからなくなったり、書き終えられなかったりする
- ・ 「書くこと」で思考を整理したり、まとめたりすることができない

といった状況に陥ってしまいます。

「書いて解答する」ことが前提のテストでは、やはり正当な評価を受けることができません。





テストでのICT活用の意義

1 正しい評価を受けるための前提の提供

読み書きに困難がある場合、従来型の「紙と鉛筆」のテストでは、本人の思考力や知識量に関係なく、読み書きの遅さやミスで点数が下がってしまいます。音声読み上げ機能や入力を利用することで、読み書きの「手続き」による負荷をバイパスし、本人が持っている本来の「学力」を正確に測定できるようになります。

2 自己肯定感の維持と意欲の向上

どれだけ努力しても、読み書きの困難のために低い点数が続くと、子どもは「自分はダメだ」という無力感を抱きやすくなります。自分でツールを選んで解決する経験は、自立心や「自分に合った方法があればできる」という自信につながり、学習への意欲を支えます。

3 合理的配慮を提供する側の教員の意識の向上

教員の多くは、無意識のうちに「自力での読み書き」を評価の前提として捉えがちですが、ICTの活用はその前提を揺さぶり、「テストで本来測るべき能力は何か」を明確にします。また、テストでの入力・出力に適切な支援を講じることは、その子が抱える「学びにくさ」を浮き彫りにします。このプロセスを経て、教員の意識は「テスト時のみの対応」から「日常的な合理的配慮の提供」へと前向きに変化していくことが期待されます。

テストと日常の連続性を意識し、日常の方法と同じやり方でテストを受けることが大切です。日常受けてている合理的配慮は、テストでも活用しないと「学習の成果」を測定することはできません。



どの子に、どんなサポートが必要か

大前提として、「診断の有無で判断する」のではなく「学習上の困難」の実態に注目する必要があります。特にテストの実施にあたっては、正当な評価を受けるためには以下の2点が重要です。

情報が届いているか

考えを出力する手立てがあるか

ここに困難が認められた場合、「その子が情報を取得するための手立て」「考えを出力するための手立て」が必要です。

さらに「スムーズであるか」にも注目する必要があります。「過度に時間がかかる」「負担感が大きい」状況を「苦手だけどできている」と評価することはとても危険です。

以下にあげた例以外にも、日常の理解度や言動に比べて違和感を感じるがあれば、まず介入を試みるのが大切です。

「読むこと」で困っていないか



- ✓ 全員に読み上げありとなしの小テストを実施した時、結果に明らかな違いがある子は対象かも
- ✓ 初見の文章を読む時間をチェックした時、普段に比べて時間が過度にかかる子は対象かも

「書くこと」で困っていないか



- ✓ 「書く活動」を過度に避けたり拒否したりする子は対象かも
- ✓ 視写が極端に遅かったり、お手本が手元にあっても正しく書けない子は対象かも

読むのが難しいなら音声を聞けばいい

書けないなら入力すればいい

ICTの活用を考える際、ついそう単純に考えがちです。しかし、実際はそれほど簡単ではありません。

音声情報の聞き取り方や入力方法には、子どもによって千差万別な「合う・合わない」があります。適切な方法の検討はもちろん、それらを使いこなすための前提スキルの習得といったプロセスを飛ばしてICTを導入すると、かえって負担を増やしかねません。必要な手立てであっても負担が強くて有効性を感じられない体験は、とても危険です。必要な手立てを選択できなくなる事態を防ぐためにも、事前の丁寧なマッチングとステップアップが不可欠です。

この子は、どんな形なら、正しく情報を受け取ることができるの

- 音の情報だけあればいい
- 音の情報+文字を目で追っていくガイドが必要
- 音の情報が探しやすいようにテストのビジュアルの中に配置することが必要
- 音の情報+背景色の変更が必要

この子には、どんな入力方法が、適しているのか

- キーボード入力か音声入力か、手書きからのテキスト変換か
- ローマ字入力かひらがな入力か50音キーボードか
- 外部キーボードかオンスクリーンキーボードか

使用機器の必要な機能をスムーズに使えるか

- 前提となるスキルがついていない場合は、まずは個別に習得の機会を持つことが必要



① 市販テストの読み上げデータの活用

光文書院の音声読み上げつきテスト

市販テストに、あらかじめ読み上げデータが用意されているので、すぐに導入できます。

導入方法

- 対象のテストを購入
- 光文ひろばへユーザー登録してログイン
- データを公開するテストを選択
- 児童用URLを発行
- QRコードで共有



光文書院「テスト音声読み上げ」

<https://www.kobun.co.jp/products/onsei-yomiage/>



POINT

- テストを購入していれば無料で使えるので、学級全員に試すことが容易にできます。試せることで、自分に必要な方法に気づけることも期待されます。
- 一方で、国語の場合、2026年2月現在では設問のみの読み上げになっていて、問題文の読み上げがないことと、ビジュアルのデータがなく、再生している音がどの問題の音声なのか分かりにくいという課題があります。



② 音声ペンの活用

エスコアールのアクトボイスペン

紙のテストに貼って使えるため、低学年の子であっても無理なく使えます。イヤホンも使えるため、集団の中でも音声を聞きながらテストを受けることができます。

導入方法

- 問題文や設問にシールを貼る
- 録音モードでシールをタップしてから音声を録音する
- 再生モードでシールをタップすると再生される



エスコアール「音声ペン -アクトボイスペン-」

https://escor.co.jp/products/products_item_act-voice_pen.html



POINT

- 問題文が長文の場合は、段落でシールを分けて録音し、考える時に必要な場所だけ再生できるようにしておくとうりやすいです。
- 事前の録音作業が必要ない音声ペンとして、翻訳機能のあるハンドスキャナーの活用という方法もありますが、縦書きをフォローしている機種が限られていたり、ペンが大きく小学生が読み取り操作をするのは難しかったりといった課題があります。



③ 端末のテキスト認識の活用

iPadの「テキスト認識表示(Live Text)」

テストを写真に撮るだけで、縦書きも横書きもテキスト部分を読み上げさせることができます。

導入方法

- 「設定」→「一般」→「言語と地域」を選択する
- 「テキスト認識表示」をオンにする
- 読み上げさせたい部分を選択し、「読み上げ」をタップする



Apple「iPadユーザーガイド」

<https://support.apple.com/ja-jp/guide/ipad/ipad63cc224a/ipados>



POINT

- ルビがついた問題文の場合は、ルビの部分を「一列」と認識して読むことがあります。
- 「読み上げ」のボタンは選択した後に出てくる帯の「>」の先にあるため、微細な操作の苦手な子は苦戦することがあります。

コピー すべてを選択 調べる 翻訳 Webを検索 >

< ユーザ辞書... **読み上げ** スペル 共有...



④ 専用サイトの活用

NankaのMOJISONA - もじソナ -

テストを写真に撮ってアップロードするだけで、タップした場所をハイライト付きで読み上げてくれます。解答欄も簡単に配置でき、入力も可能なので、読みだけでなく書きの困難がある場合も使いやすいです。

導入方法

- アカウントを取得してログイン
- テストのデータや写真を登録
- 自動解析されて、タップした場所の音声を聞くことができる



学修支援サービス もじソナ

<https://mojisona.com/>



POINT

- テストのビジュアルそのままの中から音声を聞きたい部分をタップするだけなので、必要な情報を探しやすいです。
- 複数の読み上げや入力の方法が、直感的に使えます。





入力の活用

音声入力

話すことに困難がなければ、すぐに導入できるため、負担感が少ないです。

一方で、使いづらい場面もあるので、並行して他の方法の習得にも取り組むことが大切です。

キーボード入力

汎用性が高い手立てですが、キーの数が多いことから、スキルを習得してからでないと方法としての活用が難しくなります。また、ローマ字入力は「書きたい文字をさらにローマ字に変換する」という負担があるため、子どもに応じてひらがな入力も試行しての検討が必要です。



POINT

- 「50音キーボード」や「フリック入力」といった、オンスクリーンキーボードもあります。どちらも「情報の探しやすさ」という点で負担は少ないのですが、画面のスペースを必要としているので、情報量が増えてくると使いづらくなることがあります。



音声入力+手書き

文字の想起に負担が大きいケースの場合、キーボード入力でも「必要な文字の形」を探す作業をしていると何が書きたかったのかわからなくなってしまふことがあります。

前ページでも書いたように、活用場面を考えてキーボード入力の習得を進めていくことは大切ですが、それまでの期間は音声入力ができるように別室でのテストの実施などが大切になります。その際、「考えながら書くことは難しいが、見て書くことはできる」という時は、「音声入力した解答を見ながら紙のテストに書き写す」ことが有効です。

音声で自分の考えを出力した後なので、ただ書き写す時より内容のイメージを持ちながら作業することができます。



POINT

- 「自分の考えを書く」ために必要な要素のどこで困っているのかを考えることで、「困っている部分を支え」「活用可能な部分を活かす」ための組み合わせが見えてきます。

自分の
考えを持つ

言葉に
置き換える
ことができる

文字に
置き換える
ことができる

文字を
書くことが
できる

※ 上記以外にもたくさんの要素があります。



取り組みを振り返って

「読み書きはできて当たり前」という前提が、本来の力を出せない子どもたちから自信を奪っています。適切な支えのないテストは、単に「できなさ」を突きつけるだけの場になってはいないでしょうか。

だからこそ、ICTを眼鏡のように「欠かせない当たりの道具」として、学びのスタートラインに置く必要があります。選べる手立が増えた今、テストを困難の確認ではなく、「実力を発揮し、自信を育む場」へと変えていく、そんな転換が求められています。

音声情報の提供方法	提供側の準備の負担	子どもの操作の負担	ハイライト表示	聞きたい場所の探しやすさ
① 市販テストの読み上げデータの活用	○	○	×	×
② 音声ペンの活用	△	○	×	○
③ 端末のテキスト認識機能の活用	○	△	○	○
④ 専用サイトの活用	○	○	○	○

× …ない・難しい △ …多少負担がある

入力方法	必要な主なスキル	メリット	デメリット・課題
① 音声入力	言語化能力、修正能力	速い、運筆負担ゼロ	環境(騒音)に左右される 同音異義語の誤変換に注意
② ローマ字入力	ローマ字のルールを理解 手指の巧緻性	標準的 汎用性・将来性が高い	習得に時間がかかる、 「音→文字→ローマ字」と複数の 変換が必要で、負荷が高い
③ 50音 キーボード	50音表の並び方の理解	低学年から使える	文字を探す負担が大きい 長文を書くには効率が悪い
④ フリック入力	方向感覚、微細運動	情報が少ない 動きが最小限	画面が狭くなる 方向と音の結びつきが必要

校内研修会での高橋麻衣子先生の講演より



小学生で間違いから学べる子は少ない

小学生ですよね？直しで学びたいとか学べるって思ってますか？
答えを写すだけになってませんか？「全然できなかった」と意欲を
失わせるだけになっていませんか？

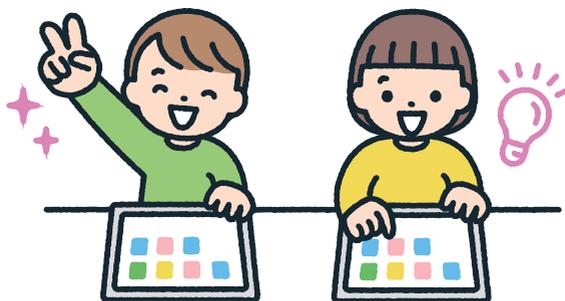
100問のうち2、3問だけ間違ってしまったとか、どうしても通りたい
試験があるとかであれば、ああ、この間違いはこうしたら良かった
と学べるかもしれないけど、小学生で『直し』から学べる子は
少ないですよ。

先生たちは、まずはヒントなしとか支援なしでやらせて点数を出して、
それを『直す』ことで学ばせようとするけど、それって本当に効果
があるのかを考えてほしい。

小学生の時代に一番大事なものは、「意欲を失わせない」こと。

そして、「自分はこうすればわかる・できる」という方略を知ること。

※ テストを「できない」を繰り返し体験する場にしないためにも、ICTを
活用した介入が重要になります。



※ このパンフレットは、パナソニック教育財団の実践研究助成を受けて
作成しました

※ 掲載情報は、いずれも2026年3月現在のものです